

作ります!

file.15

in the making

バラバラに壊れ、離れて、拡散しようという世界の流れに逆らい、モノとモノを結びつけ、秩序づけ、新しいなにかを生み出そうと奮闘する強い意志を持った人々がいる。なにゆえに、彼らは、モノを作るのか。彼らの意志の源を確かめたい、と思う。

「ローテクだから発想が生きる」
「紙パイプロボ」の「超」独創



「地球侵略をたくらむ」パイプロイドに襲われる、ツノダさん。手前左が、メインキャラクターの「マッスル・ジョー」

ツノダタカシ

31歳

おもちゃデザイナー

「パイプロイド」 紙工作キット

封筒型のパッケージを開けると、カラフルな紙パイプが6本。長さ25^{センチ}、直径は8^{センチ}と小さい。だが、表面に光沢があつて、確かな重みを感じる。

これらの紙パイプを、説明書通りに、切って、曲げて、穴に差し込んで、つなげていく。パイプは硬すぎず、軟らかすぎず、切るときの感触が心地いい。

すべてのパーツを作りあげて、頭と手足、胴体を合体すると、ちよつと間の抜けた表情のロボットが完成する。パイプで出来たロボットだから、名前は「パイプロイド」。設定では、ナゾの星から地球を侵略しにやつて来た宇宙ロボらしい。

パイプロイドは、ゲーム・玩具がらくたの企画開発会社の「ゴト」(京都市)が今年2月に発売した紙工作キットだ。ロボットは5種類で、その名も男気あふれる「マッスル・ジョー」¹、自由な「ジェット・ジョナサン」²など。価格は1体500円。店頭販売は、京都市内のアートショップ1店だけだったが、独特の雰囲気を持ったロボットのキャラクター性に注目した新聞やテレビが紹介してから、ネットの直販サイトに注文が殺到。一躍注目商品になった。

紙パイプで作るロボットなど、見たことも聞いたこともない。しかも、購入層として想定しているのは、日ごろ、紙工作に縁がなさそうな大人たち。パイプロイドは、前代未聞の「大人の紙工作キット」なのだ。

紙で本当にできるのか

パイプロイドを生み出したのは、ゴト開発部に勤めるおもちゃデザイナーのツノダタカシさん(31)だ。ツノダさんがこう話す。



「紙であることに不安を感じることもありませんでした。でも、やはり紙で作りたいくて」
現在、パイプロイドは、耐水性がある少し厚めの「サクセン」という印刷用紙を材料に使っているが、この紙に決まるまでは、あらゆる種類の紙を使って、試行錯誤を繰り返したという。

「硬いけど、切りやすい。穴にはめやすいけど、簡単には抜けない」(ツノタさん)

という矛盾する条件を満たす紙を見つける必要があったからだ。さらに、紙選びで、ツノタさんがこだわったのは「質感」だ。「ハサミで切ったり、パイプを穴に差し込んだりするときに、「工作をしている」という確かな感触を得られる紙が欲しかったんです。作り心地を確かめながら、紙をいろいろ替えてチェックしました」

ツノタさんが勤めるコトは、携帯電話で遊ぶパズルゲームや、携帯ゲーム機に使うLSIなどが主な商品。1996年の会社設立で、従業員は約30人。ほとんどが、デザイナー、エンジニア、クリエイターというモノ作りの会社だ。

コトの創業者は、任天堂でゲーム&ウォッチやゲームボーイを開発した故・横井軍平さん。伝説的なクリエイターだった横井さんの有名な言葉に、「枯れた技術の水平思考」というものがある。使い尽くされた技術でも、発想を変えて、違った分野に応用すれば、ヒット商品を作れる、という開発哲学を言い表したものだ。

97年に交通事故で死去した横井さんと、京都市立芸術大学卒業後、99年にコトに入社したツノタさんとは、直接の接点はない。しかし、パイプロイドには、「枯れた技術の水平思考」が会社のDNAとして



「こうやって作るんですよ」と紙パイプを巻き、紙ロボットを作るツノダさん。工作に最適な紙を見つけるために作ったロボットは、数知れないという

て、注入されているようだ。コトにはいまでも、営業やマーケティングの専門部署がない。前社長で現顧問の瀧良博さんは、こう話す。

「人数が少ないということもあるけど、販売とかマーケティングとか、あんまり関係ないねん。社員は、モノづくりがしたい人ばかり。いろいろ言っても、結局、自分の欲しいモノを作ってしまうから」

そういう瀧さんも、社長の座を降りてから、自分が欲しいモノを作った。2003年春に発売した紙パイプを作る「ひねもす」(工作キット(価格5229円)だ。「ひねもす」はB5判程度の大きさの卓上器で、金属シャフトに折り込みチラシなどの紙を留め、横についたハンドルをクルクルと回せば、同じ太さの紙パイプが簡単に作れるように工夫されている。多くの紙パイプを使い、大きな工作物も作ることができる。

「ひねもす」は、幼稚園や小学校の工作教室などで活用されているが、一般消費者向けとはなかなか言いがたい。だが、これがパイプロイドを生み出す元となった。

当時、ツノダさんは、携帯ゲームの制作が主な仕事だったが、紙パイプを使って、

動物や乗り物に見える作品を作るのはどうすればいいのか、京都市立芸大卒の経歴を買われて、「ひねもす」のチームからアドバイスを求められていた。気がつくど、どっぷりと、「ひねもす」にかかわっていた。ちょうど、自分の作品として「データ」しか残らない携帯ゲームの制作に満足感を感じられなくなっていた時期でもあった。ツノダさんがこう話す。

「親の話では、子どものころから絵が好きで、しかも模型もよく作っていたそうです。だからやはり、形のあるキャラクターを自分で作りたかったんでしょね。そし

ツノダカシさんの年表

1975年1月	群馬県で生まれる
93年4月	京都市立芸大に入学。ビジュアルデザインを学ぶ
97年3月	大学を卒業。その後、フリーのデザイナーとして活動
99年9月	株式会社コトに入社。携帯電話のゲームなど制作
2003年	発売された「ひねもす」のプロジェクトに参加
04年12月	パイプロイドの商品開発に着手
06年2月	パイプロイドを発売
8月	パイプ製造を機械化。全国に供給開始



パイプロイドは専用サイト(<http://piperoid.jp/>)でも販売中

て、「ひねもす」で多くの作品を試作するうちに、折り込みチラシよりも、きれいに模様を印刷した紙でパイプを作れば、顔や手足なども、うまく表現できるんじゃないか、と思いついたんです」

「かわいい」と女性も工作

同じころ、「ひねもす」で作った紙パイプを使う親子参加の工作教室で、印象深い光景に出会った。

「子どもそっこのので、けっこう、お父さんとかが全部作っちゃうんですよ。『おれに任せろ』みたいな感じで。大人だつて工作したいんだな、と思いました。それで、模様付きの紙パイプを組み立てればいだけの工作キットを作ろうと、一人で商品アイデアを練りました」

ロボットのデザインは、紙パイプの形を生かしたシンプルで、かつレトロなスタイルに仕上げた。紙にこだわり、パッケージもコストが高い縦型の紙袋を採用することにした。商品のコンセプトは、昨年初めに、社内で発表

したときから、全く変わっていないという。「大人じゃなくて、やはり子ども向けのほうがいいんじゃないか、という意見も社内ではありました。でも、自分の商品を一番知っているのは自分ですから。周りの意見は大切ですが、丸ごと聞き入れないことも大事。そうじゃないと、芯がブレてしまいますから」

パイプロイドの購入者は、女性のほうが男性よりも5割ほど多い。20代前半の女性が、友達の間でも、まとめ買いしていることもあるという。

「パイプロイドは、男性が、女性との会話のきっかけを作るもてるアイテムとしての狙いもあったんです。オフィスの机に置いたパイプロイドに、社内の女性が「かわいい」と興味を示して、会話が始まったりするとかという想定です。女性が自分で工作してくれるとは思わなかったから驚きでした。うれしい誤算です」

発売以来、パイプロイドは4000個が売れた。紙パイプを巻くのをパート女性3人による手作業に頼ってきたため、生産ペースは月産で多くて500個がいいところだったが、このほど、コトの技術陣の力で紙巻きの機械化に成功。最多で月産8500個の生産が可能になった。取扱店も9月現在、東急ハンズ三宮店など全国で5店に増えた。ツノダさんがこう話す。

「自分の手のひらからモノが生まれる実感を、楽しんでもらいたいと思ってます」

パイプロイドの「地球侵略」は着々と進む。そのうち、あなたの近くのデスクにもパイプロイドが現れるかも。